目次

▲調査
松林の積雪及融雪に對する影響
醋酸石灰製造に就て
▲文苑
病床默想錄
東京より
▲和歌
卒業を祝す
▲雜報
學校記事
寄宿舍通信
會員異動

大正五年四月二十五日　第七拾八號　（毎月廿五日定期刊行）　（明治四十三年六月十四日第三種郵便物認可）

調査

松林の積雪及融雪に對する影響

エ、ジエ、ジニック

サンフランシスコ連山の麓コロラド臺地のニ、ニコ國有林に於て觀測に從事されり、此處は拔海八千乃至六千呎にして殆んど一面に赤松の林なり。氣候は一年中の變化も一日中の變化も著しく、又一年間の平均總降水量約二十四吋にして七月八月の候雷雨としての降水及十一月以後翌年四月に至るまで雪としての降水をその主なるものとす森林中には處々に大小種々の空地（樹木なき）あり多くは半エーカー前後なれ共往々數平方哩に及ぶものあり。この内フォートバレーパークと云ふはフラグスタッフ市より北西九哩にあり、觀測に從事したる所にして面積三・四平方哩 海面を拔くこと七千二百五十呎なり。

▲森林中とパークとの降雪量の比較　森林中とパークとの降雪量を比較すれば其水當量は一定の差無きが如し、時に、風弱くして濕りたる雪の時は樹の群の中に澤山の雪が積むことあり、この雪は多くは數日中に林中の空所に吹き去らる、この量は精確に計ること能はず。

▲森林中とパークとの降雪分布の比較　パークではその等に積れども森林中では空所に多くして樹の下には少し。

▲森林中とパークとの溶解の比較　雪の解くるには土壤と大氣との溫度が主なる原因なれども此外傾斜露出の狀態輻射も影響あり雪の融くるには二つの主なる時期有第一は冬期徐々に融くるもの第二は春期急に融くるものなり。

▲冬期の融雪　冬は雪の融くること森林中の方速かなりこれ森林中の方最低氣溫も平均氣溫も高きによる。森林中にては樹木の下には、唯薄く積雪し一度これが破るるときは急に融くるなり、又樹木岩石枯葉等の輻射の影響も大切なることなり、極めて烈しき降雪の後にも樹下は數日にして地表を表すものなり、この地表の出でたる所を生ずれば又その四方の融雪を速かならしむ霜もパークよりは前に消ゆる故冬の終りには融雪の水を土壤の吸收すること多し斯く森林中に於て冬期融雪速かなるが故に融雪は常にパークよりは速かなり。

▲森林の内とパークとの積雪の水當量　水當量は森林の中の方少しと雖も雪の密度は何等一定の差を認め難し理論上は風や日光のためにパークの方雪が密度大なる筈なり

▲春の融雪　一般には春融雪は氣溫約華氏五十度を越ゆれば起り三月朔日後數日中に起る一九一〇年一一年の冬期には三月八日に起りたり、森林中にては此頃より僅かの融解の度を增したるに過ぎざるもパークに於ては速に約一週間にして雪を見ざる

に至れり、最低氣温低きか故にパークに於ては雪の下に氷の殼を生ずこれは一九〇八—一〇九年及一九〇九—一〇年特に觀測したるがうの殼の厚さ一吋より二吋に至る一九一〇—一一年には最高温度が變化烈しかりしと降雨多かりしと冬期雪少かりしとにより厚四分の一吋に過ぎざりき。三月十三日にはパークには雪を見ざりしが森林の空所には澤山にありたり、パークの端より四分の一乃至二分の一哩にある積雪は三月廿三日に至つて初めて消失せり更に深き森林中には四月十日に至つて未だ雪を見たり。一九一二—一三年には融雪は三月廿七日に初まり四月三日にパークには雪を見ず四月十日に至りても未だ森林中積雪計棒の近傍に雪を見たり、十六日迄は森林中の空所及樹群の北方に雪ありたり。殘雪は皆森林中の空所にあり殊に樹群の北側にあり、東西に細くりの深さ一樣ならず密度も一定ならず端は淺くして水當量大なり、融解はその端の方速かなり。

▲土壤の狀態　パークに於ては氣温低くして土壤は冷却され且うの上には氷の層を生ずる故冬期の降水は森林中の降水よりは實用上の利益少し。此土壤及氷は春の融雪により生ずる水を吸收することを障ぐ。森林中では平均氣温高く又枯葉のために深く土壤の凍るを防ぎ常に水を吸收し易からしむ凍土の深さは樹木の南側に少く北側林中の空所最も多し、樹木の北側に多きは日光の影響にして空所に多きは枯葉の影響なきが故なり。積雪も亦影響あり。融雪の水森林の中にては冬期融くるに從て吸收するが故に土壤は春の雪解により直ちに飽和し、傾斜によつて流れ去る。一九一〇—一一年及一九一二—一三年には森林中にてはパークよりは早く流出し初めて永く續きたり、然しパークより流出するものに比しては僅かなり。パークにては水は凍れる地中に入ること能はず、又未融解の雪により流出を多少障げられれと混じてうの融解を速かならしむ、然る後に急流となつて南東の隅よりリオデフラグ川に流入す

▲露出の影響　北向と南向とは非常な差あり日光を避くる時は冬期北向は融くることなゝ、春の近くなりて氣温上れば漸く徐々に融解す。森林中の北向の傾斜面にては水平面又は、南向きよりは十日間長く雪を見る又森林なき北向の斜面よりは森林ある北向の斜面の方雪を保つこと永し。クレーター山の森林中の斜面にて觀測したる結果は北及東に雪を保存すること多く南及西向の斜面に少し。

▲融雪後土壤の水分　土壤の水分を融雪後に計りたるに森林中のものゝ方勝れり。此吸收及保存に關しては種々の原因あるべし第一に森林中の霜の深さ小にして吸收に便

第二に森林中に於ける雪と土壤との間に氷の殼を生ぜず。烈しき降雪の際にも樹下の雪は速に消ゆ近方の雪の融けたる水を吸收するに便なり、加之風弱き爲めに蒸發少く枯葉の保護あり。土壤の溫度低きが故に水を保存すること多し水面よりの蒸發は森林中に於てはパークに於けるものゝ七十パーセントに過ぎざりき四年間平均に於て風速々五十パーセントなり、これ最も重大なる原因にはあらざるか大切なる原因としては土中溫度の低きことなり。地下二呎に於て一九一三年の五六七月の値はそれ〴〵パークにては五二•一、六一•一、六五•九森林にては四一•七、四九•二、五四•八度なり。但し華氏の度盛による。

▲土壤水分の測定　種々なる標本により土壤の水分を測定したる結果次の如し。

一、表面の層は森林中の土壤はパークに於けるものよりは良く水分を吸收し多量を永く保存す。

二、森林の中にても枯葉に被れたる處及樹木の密生せる處は空所よりは吸收も保存も良し。

（以上氣象集誌より抜萃す日光山人）

醋酸石灰製造に就て

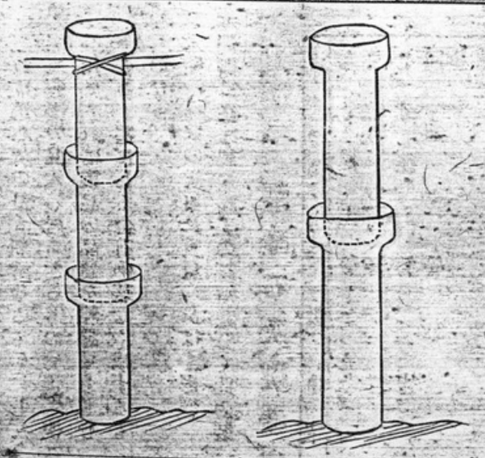
（下）

柳澤得

一、用具種類及附屬品

(1)土管六寸のもの直參拾本曲一本（土管一本長三尺一寸）
(2)受樽（四斗入酒又は醬油樽の空）
(3)溜桶（二石入又は二石入位のもの）
(4)ツメボロ（一裝置に約一貫目）
(5)ツメ棒長サ八寸
(6)槌（木製を好しとす）
(7)引廻鋸
(8)土管渡シ用林
(9)柄杓（一升入位）
(10)負樽（運搬用にして二斗入）
(11)針金等

一、土管の繼ぎ方



普通三本宛接ぎ据付後又續く

一、木醋液採取裝置（空氣冷却）經費調

(1)土管代（山着一本直六十一本三十四錢曲一本參拾六錢）拾圓五十六錢
(2)人夫賃（一日五十錢とし三人篭場迄運搬せるものとす）壹圓五十錢
(3)受樽一箇（四斗入）約四拾五錢
(4)溜桶一箇（二石但し古物）約壹圓
(5)柄杓一本（一升入）約貳拾五錢
(6)負樽一本（二斗入）約壹圓貳拾錢
(7)繩又は針金　約拾錢
(8)ツメボロ（約壹貫目）約四拾錢
(9)粘土若くはメリケン粉

（一裝置に三合位）約參錢五厘

計　拾五圓四十九錢五厘

タール除去法

木タールは醋酸石灰の品質を害すること甚だしく醋石製造事業の成否は此方法の如何に依るといふも過言にあらざるべし以下少しく實驗上の除去法を記すべし

(1)冷却裝置は可成高壓の生せざる樣据付ぐるを要す

即ち煙導に使するため急傾斜とし煙筒上に於て當分調節をなすが如きは高壓を生ずる虞あり故に煙引の惡しくならざる以上は可成緩傾斜を可とす從つて熱度の高きもタール流出多く白炭は黑炭より熱度高き爲めタール分多し。

(2)冷却裝置の溜桶にて輕タールを除去し靜かに木醋液を吸み取り運搬す吸み終りたる後底に沈澱せる重タールを棄つべし。

(3)製造場に運搬したる木醋液は貯藏槽中にて輕タールを掬ひ取り沈澱せる重タールは二週間に一回位宛掬み出し又は底部に栓を設け排除すべし、而して貯藏槽底より五六寸位の處に於て竹筒にて貫通し甲槽より乙槽に流入する液は常にタールの除去せられたるものなるを要す而して乙槽より濾過裝置に移る

(4)濾過裝置にては比較的有用なるタール除去行はるゝにより此の設備には注意を要す

(5)中和の際石灰を混和する毎に攪拌し石灰中の夾雜物と共にタールを除去す

(6)中和液沈澱にて一晝夜沈澱し重、輕タールの除去をなす

(7)蒸詰の時浮游物（最初は石灰の夾雜物のみ浮き半分位蒸詰まる時は主にタールのみ浮く）を除去す。

(8)煮詰液沈澱桶にて一晝夜半程靜澄せしめ（液の冷却せざる内はタールは遊離せず）重輕タールを除去す。

(9)中和用石灰を良しとするも若し能はざれば消石灰の最も新鮮なるものにして塵芥等の混入し居らざるものを選定使用せざれば製品の品質を粗惡ならしむること甚だしく含有%著しく減ずるものなり。

木醋液採取の炭質及重量に及ぼす影響

本問題は從來製炭職工の誤解甚しく此の裝置を厭ふもの多かりしも當事業所に於ては一二の竈に於て實驗せしめしに裝置方法の如何により反て好結果なるを悟る導の調勢如何には何等影響なきのみならず煙に至れり。

採取法は資材を立て込みて點火し炭竈の口を止め黄色に變じ苛煙を發するに至らば、士管に煙導し、稍々青味を帶び來らば外ら

醋酸石灰製造場及冷却裝置經費明細表

品名	數量	單價	金額	備考
六寸徑土管	三九〇本	〇、三四〇	一三二、六〇〇	常滑製冷却裝置用（但一裝置卅本ヅヽ十三窯分）
同曲土管	一二ク	〇、三六〇	四、三二〇	同　同
七寸徑土管	七〇ク	〇、四四〇	三〇、八〇〇	同　同（但一裝置三十五本ヅヽ二窯分）
同曲土管	二ク	〇、四六〇	〇、九二〇	同　同
釜	五ウ	八、四〇〇	四二、〇〇〇	煮詰用（口徑二尺三寸深一尺八寸約一石入）
鐵板	六枚	三、三五〇	一〇、一〇〇	乾燥用厚五厘長六尺巾三尺
鐵板	一〇ク	〇、八七〇	八、七〇〇	乾燥棚用一把九入
木醋液貯藏用水槽	八ケ	一、七三〇	一三、八四〇	木醋液及中和液沈澱用高三尺幅二尺七寸五分長三尺（但內法ニテ用材拂下代共）
樽	一五タ	〇、四四五	六、六七五	明樽（酒又ハ醬油）四斗入冷却土管ノ受桶ニ用フ
樽	五ク	〇、五三	二、六五〇	同
杓子	二ク	〇、二四〇	〇、四八〇	結晶物掬上用經六寸銅線網製
鋸	二ケ	〇、九〇〇	〇、一八〇	廻挽細鋸　土管取付用
呑口	五個	〇、四九〇	二、四五〇	木醋液貯藏槽中和液沈澱槽並ニ煮詰液沈澱桶取付用六部徑カランコック
同棒	六ク	〇、七三〇	四、三八〇	同上　八分徑カランコック
鐵棒	四本	〇、二一〇	〇、八四〇	土管接ギ目ロツメ用　徑五分長八寸
篦（鐵製）	四個	〇、二五〇	一、〇〇〇	醋酸乾燥鍛板ノ攪均器目方百目
同	二ク	〇、一九五	〇、五九〇	同　上
鍋	二組	〇、一四〇	〇、四八〇	製造場備付用
ウドンコ粉	三ヨ	一、〇九〇	三、二七〇	土管ツギ目用（土ニ混ジテ用フ）。タール掬取用ニシテ一週間ニ一回位ヅヽ張リカヘル
布（寒冷沙布）	三尺	〇、〇六〇	一、八〇〇	土管ツギ目詰込用
襤褸	四個	〇、三九〇	一、五六〇	結晶品露切リ用
焚口	二ク	一、四〇〇	二、八〇〇	半釜（結晶釜）ノ焚口
同ストール	一〇ク	〇、六二〇	一、二四〇	同
竹棒	三〇本	〇、二六〇	七、八〇〇	同
同	四ク	〇、二〇〇	一、一〇〇	長四尺徑五分　乾燥室內棚用（最下部取付）
同	二ク	〇、〇一七	〇、三四〇	乾燥室棚作用及貯藏桶ノ飲口用　長四尺徑八分
針	三ク	〇、五〇〇	一、〇〇〇	中和液ヲ煮詰釜ヘ張込ム樋　長二間徑二寸五分
同金	二ク	〇、九八〇	〇、九八〇	製造場及冷却裝置用
平釜	二個	二、八〇〇	二、六〇〇	徑四尺深六寸　結晶用
醋酸定量器	一ク	二、〇〇〇	二、〇〇〇	木醋液中ノ含有%ヲ見ル器
比重計	一ク	二、八〇〇	二、八〇〇	シヨンドル付（ボーメー比重比重計）
試驗紙	一袴	〇、〇六〇	〇、六〇〇	練習ノ內ハ常ニ之ヲ使ヒ中和スベシ
衡器	一	二、一五〇	二、一五〇	貳拾貫目迄
衡器	一	〇、九五〇	〇、九五〇	五百匁迄
南京袋	八〇枚	〇、一八〇	一四、四〇〇	內十五本ハ冷却裝置七本ハ製造場
桶（一石入）	三三本	一、〇〇〇	三三、〇〇〇	間口五間奥行四間半堀立笹葺
拂杓	四ク	〇、一七〇	〇、六八〇	
負樽	六ク	一、一〇〇	七、一〇〇	
製造所小屋掛			二五、五〇〇	
同土築窯石工			八、一〇〇	
同上人夫			二七、五〇〇	
冷却土管据付人夫			一、六〇〇	
醋酸乾燥場及製品貯藏窯			八、一〇〇	
同上用材拂下代	一六石	〇、一〇〇	一、六〇〇	
製造場周圍板張人夫	一四人	〇、五五〇	七、七〇〇	
計			四七五、九四五	但木挽割約四十坪

內、譯

製造場	二三八、九六〇
冷却裝置	二三六、九八五
平均一冷却裝置費用	約一五、八〇〇

本調査ハ主トシテ長野小林區字黑姫巢鷹山官行事業所に於ける實驗なり　（大正四年十一月）

文苑

病床默想錄

長野市赤十字社病院　閑石隱士

本月三日我林務課の久保田君が「獨逸語の辭書と首引きしたり作詩法や行政法許も見るのは宜しくない」とあつて漱石の「猫である」を貸して呉れた同君は夫れを三度精讀したとの事小說と云へば不如歸位夫れも九年前に首辭書の英譯物、講談は十年許り前に二六新聞に出た桑の平内を見た位胸中餘裕に乏しき窮屈な僕に此程の物は……と二日許りは讀んで見た夫れも他のあいた々々に猫が併に向つて感得した直理「得難き機會は總ての動物をして好まざる事をも敢てせしむ」ではないが茲に好機を得たれば二三の感得を錄し見る事とせり

○二月二十二日肋骨カリエス症手術の爲めと在つて長野赤十字社支部病院に入る桑原院長よりは三週間との御宣告を承けた蓋しオ役人の格式てな道理と來訪客の名譽を損傷すまじとの道義心とより大奮發の積り二等室をハズム即座に總豫等五拾圓を特別會計として可決確定す（固より備蓄なき身の此の金額は他費目より流用すべき附帶條件あるは勿論なり）

二十三日大手術臺上に仰臥す肋骨四枚許りを削り取られたる樣なり

メスの尖生殺與奪光りけり

大形の茶碗三杯と牛乳一合鷄卵二つを一食に定めた五尺四寸拾四貫目の荒武者も成る可く動くなとの御命令を眷々遵奉して仰臥する事茲に拾有四日

本日迄に來院親しく病床を見舞はれしは

男性四十七名　延六十九回

女性十一名　延二十三回

亦見舞狀を賜はりしは（電話長距離）一回

書面十四　書端書其他十七

來訪者延六十三回中には我が最も敬愛せる服部君の十二回をも含むは勿論時々恁んな慰問狀をも寄せらる

重患の君を見舞へば看護婦の

（品評の迷句ゞ嬉しかりける）

雨の夕胸骨截りし君訪ふて

看護婦戀ひし昔話聽さたり

海棠が雨にぢ濡れし看護婦と

火鉢夾みて酌むよしもかな

○諏訪の但馬君より貰つた

公達は梅見に腰の藥寵哉

の見舞狀たる嗚呼又何ぞ冷酷なる哉だ如何に骨と皮とが我が大部分を構成すればとて所謂公達にするとは非道からずや

僕は寒暑旱雨にも峻嶮なる急逕にもピクともしない頑健な骨太の角々した軀幹を理想として居る今は形骸こそ理想と稍遠けれ其實質に至つては極めて近接して居る事を衍覺して居る然るに況んや

また春の雪の重さや今年竹

に至つては最早や筆外のものなり

又新潟の遠藤君のいや才子の金が溜まつたのと何ぞ吾輩の實体を曲解するの甚しき哉

○昨日の長野新聞に聖峯子の筆函と稱せらるゝ嘲罵錄に

讀書は吾人向上を語る唯一の鍵である生活の進展を檢する最後の象徵である……

讀書の無いものは進歩の無いものである……

……或は晝間の事務に精氣を消費したと云ふかも知らないが恁んな貧乏な精力で遂に何事か出來るものか……日本人の失敗は皆茲に在る吾等は獨り智識慾のみならず總ての慾求にもつと徹底した手腕と眼光と精氣とを餘儀なくされる……と

近頃罕に見る健筆にあらずや

頃日忙中に大那翁の傳記を通讀せり蓋し本多博士が毎に吾人に諭さる

我等常時の業働は總て那翁の戰術に準據せざるべからず而して其一事一動皆勝たざれば殖るの決意あるべし

に基き該書の一讀は多年の懸案にて有りたればなり

全卷八百有貞の大部分は血沸き肉躍れる痛快悲壯の金文字ならざるなし

然れども余の最も感深く再讀三讀卷帙を抑閉して長嘆瞑目屢々なりしものは渠が少尉の不遇時代に憤懣遂に軍籍を拋擲して讀書

三昧に不平を消化し一圖書館の全書幾百卷（軍事な勿論行政法制財政實業より文學哲理の蘊奥に至る迄）を讀破して館主を驚嘆せしめたると尙渠が前後通ゞて責務に忠實なりし事となり（后者は姑く措き）後年全歐を蹂躙して不世出を後世英傑の上に震駭せしめしもの其胚胎全く不遇時代の賚なりしを思はゞ驚儕又悲嘆と不遇とを讀書裏に納め那翁。偉業を他日に期して自ら高く慰むる處ありて可ならずとせん乎

之れ余が讀書に對する所感とす以て奈何？

○世間は寛大の樣に見へて存外偏狹なり……之れ吾人の久しき憾なりし吾徒在校の際は勗めて大言壯語を競ひ時に或は潛に櫻肉鍋を六軒町六疊裏にツヽキ酒量を實積に爭ひ豪壯を街ひ以て雄者と誇り又仰げり如斯は些のニクゲ無き血氣の稚氣として寧ろ愛すべきに似たり然れども世間は認むるに不眞目を以てす一旦社會の同僚と伍し日夕の執務に方り徒に寡默黽勉只管及ばざるを恐るふ振りを爲すものよりも時に質疑談論に花を咲かすあらんか直に口先の人輕薄兒ゥとの即決判定（一度蒙れば容易に溶解せざる）を辱ふす況んや宴席に在校當時の十分ノ一の街氣あるに於てたや！

斯く思ひ來れば社會は實に馬鹿々々敷き者と五無齋を氣取り度き念の萌發するは既に吾れ人共に屢々味へる實感なり

然れども吾徒今日に及びて漸く現社會の何物なるかの一斑丈けは悟了せり彼の社會が吾人に同情鮮き所以のものは未だ社會は吾人を認めざるに在る其値の○、Xが獨り大言自ら偉とせば社會は吾人にのみ偏狹に見ゆるのも亦止むを得ざるなるべし

余は寛かに我行動を顧視して深く恥づるもの不尠特に自ら進んで街はんとする點に於て殊に然り

近く聞く某林區署に於ては新に蘇門出の採用を見合はせんと之れ嘘說ならざるべからず然れども其謂ふ所社會が未だ蘇友が叙述の如き行動を容るゝに至らざるに坐すと嗟亦今の林區署にも我と同型の知己あるかと感深からざるを得ざるものあり

如斯は常識の熟成に待つて矯正すべきものなり母校の面目上御互に注意し度き事共なり

○長野に蘇門會を設けたるは六年前の明治四十四年の事なり時に事毎に會するもの拾有餘名快談縱横哄笑百出軒棟を搖がせしも早も一昔となり了す

然れども我林務課尙六名を容れ時に或は往時を髣髴せしめるに近く又三名を失はんとして昨夜先づ黑崎函山君を北海道に送るべく別を市内數に惜む院内の隱士たる只床上より一句を寄せて以て其行を壯にするの外途なし即ち、

春來れば蝦夷が嶋にも櫻哉

と然るに一座應じて興に筆を我に向つて走らすもの

題　送病床高樋君

梅の花咲く日待たる藪屋敷　珍竹庵主

春あわじ柳櫻は共に見む　法學士吳ッ

春淺し寒さになやむ梅一木　谷泉生

咲く日こそ待ち焦れっ床の梅　柴適山人

俗界を離れで歸れ山の中　芋の守岡生

此間悟得經倫策

於君此回入院之機會　犀陰生

心得或物轉禍爲福因

寄此語

積む雪にしばし撓めど春日にて

又榮ゆらん紅梅の枝　久保田洋舟生

以下略

骸軀を床上に横へ轉た我職責上に欠漏なからんやを維れ怖れ偏に同僚の救掩に賴委す然るに常說の固峻にして義と情に篤き我敬愛せる上課長より僚友一同斯くも其心情の坦誠なるを寄せらる嗚呼又人世の那邊にか難路ある？

併せて我安藤課長殿始め態々以來訪を賜はりし各位と尙米山先生始め書面若くは畫はがき等にて御見舞を辱ふせる各位へ茲に深厚なる感謝の意を表す

大正丙辰二月六日夕

第三病舍東七番室にて草す

東京より

がん吉

しばらく校友諸兄と相見ざりしことを僕ば劈頭第一謝さなければならないことを深く憾とするものであります。

私が校を去つて茲に滿一ヶ年を過しました「又新しい卒業生が出るんだ」、と思つた時僕は異樣な感慨に打たれたのであります鳥兎の匆々たるを嘆せざるも亦得べけんやと古人は言ひました。僕はそれを又新しき一つの感じとして味つたのです。りの時の感ドは今茲廿一といふ考へと一緒になつて僕をこうした大都へ送つたのであります。

しかしこれ等は誘因たるに過ぎません。いくら年がたつても、壺に溜められた水は水りのものとしては外界へ突出しません。僕をこうした、大都會の眞中へ徒手の儘送り出した抑々の原因は、僕のつむじが人並以上に曲つて居つたといふことに過ぎないのです。つむドの並以上に曲つて居るといふこと、りれは、人をして所謂怪傑たらしむる唯一の要素であると共に、又人をして惡漢たらしむるものであります。少くとも無賴漢、又はならず者とするものであります。僕の曲りはりの第三者たらしむるものであらう。

僕の過去一年間、りんなものを事新しく書き立てる必要はありますまい。知る人ぞ知る。

東京へ來ての感想といつて別に變つた感じもありません。東京へ來た人が等しく感ずる所のものを僕も感じた。それにまだ來て日も淺いこしませんから。それにまだ來て日も淺いこと市中もろくに歩かない始末なので、到底深い觀察もして居ません。市中の有樣だつて、僕のまづい筆で書くよりは案内記やまた日々の新聞やを見た方が、まつと詳しく面白く、且つ有意義に知ることが出來るので、何も書く必要を僕は持ちません。

唯茲に一二ぽつと出の眼に映じた東京といふものを書いて見ませう。

東京といふ所は人間を無價値のものに迄引き下げる所だと僕は思ふのです、街上に立つて道行く有象無象百万の人をごらんなさい。彼等また何等の權威を持つや。唯帽子戴き、衣纒ひ、而して下駄穿く動物のみ上野の猿といづれ、選ぶ所がありませうぞ

人間は唯電車に鈴成りに成つて行くばかりである。唯ちよこと歩いて行く許である

彼等を眼下に見下して居るものは宏壯な建物です。嘲罵して疾走するものは自働車や電車です。

東京は科學の都で決して人間の都ではありません。人間は科學の奴隷なりといふことを痛感するはこの東京に於てであります自活して行くは猿や熊のやうな動物だ。人間は唯科學の奴隷としてのみ生きて行く。こんな論法を取つて敢て僕は辭しません。

東京へ出て人間の價値を認めようといふことは眞に難いことでした。大臣も、乞食も、紳士も、令孃も、博士も、高等官も、職工も、皆等しき無價値の動物です。僕はまだ東京に於て、美人を見たことはありません。紳士も見たことはありません。

新聞紙によつて吾人の感ずる所のものと東京市（常に大都會を意味する）りのものより受くる所のものとは、全く別個の感じです。新聞紙によつて受くる所のものは、あるいくらかの人が、多くの人の上に立つて國家社會を統治して行く。といふことを思はしめて人間の偉大さを感せしめます。然るに東京市りのものからは、有象無象の人間が唯寄り集つて、この國家社會といふものを形作つて行く。といふことを思はしめて人間の無價値を感せしめるのであります

新聞紙の報ずる所は抽象的で、東京市の見せしむる所は具象的である、といふことが眞理であつたならば、吾人は新聞紙によつての感ドよりも、東京市から受くる感じの方が眞に近いものではなからとかと思ふのであります。

こうした感ドは人間殊に青年にとつて一種の危險性を有つて居ることは僕も知つて居ます。しかしこれが、眞に僕の感じた所なので遠慮なく申上げるのでありますが、かうした感ドを與へる東京へ大志を抱いて出る青年は餘程堅實な志操を有しなくてはならぬことゝ僕は思ふのであります。

何だかつまらんことばかり書いて、書かうとする本旨をどつかへ逸したやうになつて今少し書き加へなければならないやうに思はれるがあまりに原稿紙の數がふへたからこの位でやめて、後日また不足を補ひ、または別のことについて申上ませう。

和歌

山林學校の卒業式を祝して

福島小學校長　三村傳

うゑたきし苗木もろとも年毎に林の人のおふるうれしさ

心してうゝれば茂るま木見ては誠の道のかがみぞと知れ

同ドく卒業生諸君に呈す

雜報

學校記事

○證書授與式。三月廿三日午前十時本校第十三回卒業證書授與式を擧行せり職員生徒來賓一同着席するや七宮校長擧式の旨を告げ國歌合唱に次で勅語の捧讀をなし次に北村教頭の學事報告あり了て校長より卒業生四十七名及優等生皆勤精勤生に對して證書並びに賞狀を授與し次に校長は卒業生今後の覺悟に關し懇篤なる訓辭をなして多大の感銘を與へ次に安藤知事代理の告辭及び演說あり其他西筑摩郡長宮下信一氏の祝辭演說及び青木定藏氏の卒業生父兄を代表して謝辭あり在校生の送辭卒業生の答辭形の如く正午過ぐる頃目出度閉式せり當日來賓の主なるものは知事代理安藤林務課長を始めとして松下西筑摩郡長、西澤福島警察署長、星木會支局屬、丸山梓水氏其外父兄保證人等無慮數十名なりき、左に卒業生の原籍及び氏名を擧ぐれば

原籍	氏名（イロハ順）
西筑摩郡	今井欽
同上	今井武雄
同上	市岡正茂
更級郡	長谷部久雄
下伊那郡	原正造
南安曇郡	等々力與八
西筑摩郡	千村彌之助
同上	千田政美
同上	小原靜雄
松本市	川口勇治郎
岐阜縣	加藤源一郎
同上	加茂憲太郎
石川縣	開運隆飛登
下伊那郡	竹村節三
岐阜縣	拓植五郎
西筑摩郡	中畑佐耕
東筑摩郡	中川源太
下伊那郡	鳴澤義勇
西筑摩郡	村上安太郎
岡山縣	梅村計介
松本市	野本興一
西筑摩郡	岡西猛
同上	奥村利一
同上	大澤國男
下伊那郡	熊谷清逸
同上	久保田邦治
岐阜縣	矢島武六
西筑摩郡	山崎兵平
下高井郡	丸山嘉一郎
福岡縣	福澤定雄
西筑摩郡	古畑秋藏
同上	小池茂樹
上伊那郡	小松良輔
同上	有賀正一
岐阜縣	澤田富可
西筑摩郡	坂本光太郎
上伊那郡	佐々木久一
岐阜縣	喜多村弘
東筑摩郡	宮下孝美
西筑摩郡	川馬平
下伊那郡	下平佐門
西筑摩郡	樋口勵
下伊那郡	平田美則
西筑摩郡	平田實
鳥取縣	森次潔
西筑摩郡	森下義郎

同上百瀬三一

賞狀受領者

優等生　古畑秋藏（三二年）岩田元吉、長坂清人、小田寶、宮島岩見（以上二年）矢崎清海、小澤安親、西尾彰、內山伊那登（以上一年）

在學中皆勤者　坂本光太郎

同上精勤者　小松良輔

在學年中皆勤者　丸山嘉一郎、岡西猛（以上三年）岩田元吉、長坂清人、伊深幾太郎、鈴木繁、山下不二三、藏尾眞、小田寶、原治二（小岩井茂樹、丹澤潔、出雲彦一、富士川鏡一（以上二年）小澤安親、伊東厚、瀧澤銀治郎、横井正守、唐澤繁夫、下平之雄、伊藤芳郎、木下武夫、原川只一、加藤七藏、志津幸祐、西尾彰、下島俊二、細窪友一郎、內田新之助、土井薫、日野櫻亮、三村善三、月田喜代次、和田實也、古根勳、嶋田德之助、北川眞（以上一年）

在學年精勤者　梅村計介、山崎兵平、樋口勵、星加正雄、小林右內、原正次（以上一年）

知事告辭

木曾山林學校卒業生諸子諸子今や多年螢雪の功成り茲に本日を以て卒業の榮を荷ふ何物の幸慶か之に過ぎん然れども諸子の卒業たる唯僅かに林業の門戸を窺ひたるに止まり林業の理論と實際との活用練熟に至りては更に幾多の歲月と不斷の努力とに俟たざる可からず惟ふに林業の施設は國家百年の大計にして治國の要道に關するや大なり之を古今の歷史に徵するに林野の治廢は國家の興亡と其軌を同うするもの尠なからず而して本邦現時の林業たる其發達稍見るべきものありと雖も之を歐米先進諸國に比すれば不幸にして其差霄壤も只ならず諸子今や本校の課程を終り實務に就くに當り深く思を茲に致し能く學理と實際との調和を圖り故老の實驗に聽くと共に日進學術の應用を忘れず實踐勞を厭ふなく躬行低きを恥づるなく以て本邦林業の發達を企圖すべし凡そ林業の革新たる極めて至難にして因習ありて慣行あり一朝一夕の能くし得べき所にあらず諸子願はくは不屈不撓勤勉力行以て永遠の策を立て緩急の別を計り大にしては國家の爲小にしては自家の爲大に斯業の發達に盡瘁せられんことを一言以て告辭とす

大正五年三月二十三日

長野縣知事從四位勳三等　赤星典太

送辭

三冬の苦寒既に去りて蘇峽の山河藹々たる和風に滿ち三春の行樂將に多からむとする時に當り茲に本日を卜して本校第十三回卒業證書授與の盛典を擧行せらるる惟ふに兄等か今日此榮を得たるは是れ偏に諸先生の懇切なる薫陶啓發の致す所なりと雖又兄等が不撓不屈能く螢雪三歲の艱苦を嘗められし成果たらずんばあらず兄等今や其堅實なる頭腦と優秀なる技倆とを提げて多端なる我が林業界の人たらんとす抑々我國斯業の現狀を考察するに諸兄の翺翔すべき天地は廣大にして而も諸兄の力を要望するや切なり是れ正に諸兄が多年蘊蓄せる知識と練磨せる技倆とを縱横に發揮すべきの時なり而して我國の林業は兄等の努力を俟ちて益々發展せん願みれば兄等は生等入學以來常によく友愛の情誼を盡して指導誘掖せられたり然るに生等未だこの恩誼に報ゆるの遑なく今日爰に袂を分たんとす吾は實に情に於て忍びざる所なり然りと雖生等は益々努力勉勵し兄等の志を繼ぎて益々校風の發揮に力め敢て諸兄の後進たるに愧ぢざらんことを期す冀くは諸兄よ今後と雖生等後進輩を懷ふこと舊日の如かれ情切にして言ふ所を知らず聊か蕪辭を叙べて送辭とす

大正五年三年廿三日

在校生總代　岩田元吉

答辭

謹んで啓す本日は如何なる吉日ぞ生等四十有七名の爲茲に卒業證書授與の盛典を擧行せらる生等の光榮何物か之に加へん顧みるに生等本校に入學以來三星霜資性の駑鈍なるに拘はらず竟に今日あるを得たるは實に校長先生並に諸先生の賜にして師恩の高且つ深なる山海も啻ならざるなり茲に證書授與式に際し知事閣下校長先生並に來賓各位の懇切なる訓辭及祝辭と在校生諸君の送辭とを忝うす生等感激の至りに堪へず生等幸に本校の課程を卒へたりと雖僅かに林業の一端を學び得たるのみ之を實地に應用し十分の成果を收めんには前途尙遼遠なり生等不敏と雖至誠一貫黽勉事に當り克く本校敎養の趣旨を完うし鴻恩の萬一に報い今日卒業の榮譽を空しうせざらんことを期す謹みて卑衷を陳べて以て答辭とす

大正五年三月廿三日

第十三回卒業生總代　古畑秋藏

○校友會送別　式後直ちに卒業生は紀念撮影をなし夫より校友會主催の送別會あり七宮會長の挨拶北村敎諭の演說在校生の送辭卒業生總代川口君の謝辭ありて閉會

○謝恩會　校友會に引續いて卒業生は謝恩會を催し職員一同を招待し茶菓の饗をなせり席上七宮校長、新家敎諭の談話あり加藤書記は自家の半生の經歷を語り卒業生の前途に向て一のヒントを與へられたり

○級主任級長校友會役員等任命　二三學年級長及び本年度校友會役員左の通り任命ありたり

三學年級主任　大塙敎諭
二學年級主任　宮川敎諭
三學年級長　宮嶋岩見
同副級長　岩田元吉
二學年級長　矢崎清海
同副級長　星加正雄

校友會役員

雜誌部長　岩田元吉
同副部長　小澤武
庶務部長　宮嶋岩見
同副部長　白木老雄
辯論部長　平田久良治
同副部長　長坂清人
擊劍部長　藏田穀郎
同副部長　奥村和吉
庭球部長　松島長二
同副部長　田雲秀一
遠足部長　原治二
同副部長　高峯傳治
弓術部長　村上英勇
同副部長　榊原武重

實習正副組長（第三學年の部）

第一　松島長二
正副組長　小田澤穀
第二　藏田治元
正副組長　原岩田二郎
第三　各務傳英吉
正副同　村上勇
第四　安江悅次郎
正副同　宮島岩見
第五　長坂清人
正副同

同上（二學年の部）

第一　矢崎清海
正副組長　伊下平厚雄
第二　瀧澤新三
副正　下澤銀治郎
第三　横井實
正副同　小澤正守
第四　梶田安親
正副同　內田新之助
第五　西尾彰
正副同　星加正雄

○春期實習　四月四日より春季實習に取りかゝれるが事業の種類並びに程度左の如し

苗圃の播種及床替　約千六百坪
造林地新植及補植　約四丁歩
農作物仕付　約八百坪
落葉松林手入　約三丁歩
其他

而して終了期は大暑四月末なるべし

○入學式　四月四日本校入學志望者九十六名に對し試驗の結果五十七名採用することとなれるが十五日午前八時より本校に於て体格檢査を執行し十時入學式を擧行せり生徒父兄職員一同着席國歌の合唱、勅語捧讀ありて校長は新入生並に付添父兄に對し訓辭希望をなし在校生總代宮嶋岩見君の迎辭父兄總代佐藤正太氏の挨拶につぎて入學生總代宮澤末雄君の宣誓の辭朗讀あり閉式せるが一名の入學取消ありし爲結局入學生は五十六名となれり其本籍氏名左の如し

本籍氏名

本籍	氏名
東筑摩	宮澤末雄
西筑摩	佐藤誠一
下伊那	井原邦雄
同上	吉澤豐一
岐阜縣	鷹見勳
西筑摩	山崎多門
西筑摩	家高碩三
埴科	大瀨房八
下伊那	鈴木源一
岐阜縣	喜多村勇
西筑摩	代田實
高知縣	伊東近良
同上	古畑眞十
山梨縣	大木多喜雄
岐阜縣	富士川金二
東筑摩	石川縣戸部謙吉
東筑摩	米久保春雄
同上	箕部覺明
東筑摩	宮下武夫
福岡縣	大坪時治
級	青木忠太
岐阜縣	和田常次郎
西筑摩	福川正三
北佐久	內藤玲吾
同上	矢嶋穰
岐阜縣	山本茂
西筑摩	井上新次郎
愛媛縣	坂巻利一
西筑摩	星加晴雄
西筑摩	前野秀宗

南安曇　長崎信一　西筑摩　中村治郎
南安曇　唐澤正義　岐阜縣　井戸精一
南安曇　野本美嘉　静岡縣　佐塚甲子
南安曇　吉田良惠　下高井　篠原將英
西筑摩　古畑要司　岐阜縣　古山五八
松本市　青木重俊　下高井　小林盛太
小縣郡　小野澤四郎　岐阜市　後藤豊吉
上伊那　橋本巖　西筑摩　藤澤鼎才郎
愛知縣　仲谷馨　上伊那　米山芳郎
岐阜縣　葛口泰藏　同上　糸魚川良二
石川縣　玉瀬孝三　名古屋市　水野鎌一郎
南安曇　草間勝　岐阜縣　小木曾政一
山梨縣　大久保幸福　愛知縣　佐藤坦

寄宿舎通信（三月より四月へ）

桃のたよりや櫻のたよりに暖國の麗かなる春に憧憬しつゝ此處木曾谷へ春風の訪れるの遲きを恨みしはこの十日ばかりが間にて候ひき暖國の氣候に較べては十日餘りの差異あらんも爭はれぬは春流石の岳風も撫づるが如き春風に漸く春の鋭鋒を鈍らし固く結ばれし木の芽も鶯の嘴も水の面も漸く打ち解けて何れも三春の打扮に餘念なき態見受けられ候、三月九日より同十七日迄に學年試驗も終り申候悲壯の努力をなして其の難關を踰ゑ後ふり顧りたる時の快感は雪に試驗後のみにはあらざれ共今の我々にとりて之れ位痛快に感せらるゝはまたと無之候進級は嬉し實に嬉しき極みに候へ共この喜悅の裏面には又一の寂しさが伴はざるを得ず候と申すは一年或は二年が間起臥を共にした親しき寮兄と永き袂別の事に候二十一日の夜は簡單なりしかど食堂に於て送別會を開催し盡きぬ名殘を惜み候例の舍生會とは打つて變り歌ふものも無ければ舞ふ者も無く至つて打ち蕭めりたるものにて候ひきされどこの寂しみの中にも喜悅とやがての躍動とに紅潮の漲れる卒業生諸兄の御顏拜しては何時しか別離の涙も乾きて只管其の前途を祝福致したる次第にて候新家舍監先生の「至誠を擁して自己の本分を盡せ」との激勵的の訓辭有之終りに卒業生諸君の萬歲と寄宿舍の萬歲とを三唱致し候こは送る者と送らるゝ者とが和する最後の叫びかと思へば思はず涙を覺ゑ申候廿三日證書授與式の了るや寮兄諸君は「後を賴む」の言を解纜の合圖に往み馴れて寮舍の港を後に洋々たる海洋に向つて見返り勝ちに乘り出され候海上恙無かれと我等は其の英姿を見送り申候、二十四日正午に舍は閉ぢられ候さらぬだに淋しき杭々原は此の舍に人の聲絶ゑては全く燈の消ゑたる如くに候、三十一日一週間ぶりに炊事場の煙筒は烟を吐きて我等の歸舍を待ち顏に候寮兄と袂別以來の寂しさと故郷に於ける惰眠とが影響してか或はホームシックか歸舍當時の舍生の元氣は頗る萎靡したる樣に見受け申候四月五日室長の任命有之候舍風の興廢が否校風のうれが我々寮舍の上級生の努力如何にあるとの校長先生の訓誨に今までたゝ無責任なりし我等は急に重荷にても負はされたる心地し此の小さき肩によく堪へ得るや否やを恐れ一は最善を傾倒してこの任を果さんと生等の意氣は正に高潮に達したる次第に有之候同日室換十二三の兩日に舍内及び舍外の大掃除をなし十日頃より大工に疊直し障子張り電工など入り込み狼藉たりし舍の内外は頓に整頓され濁りたる舍内の空氣は駘蕩たる春風に掃蕩されたる感有之候十五日には待ち焦れたる三十六名の弟を迎へ其の晩は簡單なりしかどこれを迎ふる微衷より食堂に於て歡迎會を相催し候、校長先生各舍監先生及中田先生の臨席を得新家先生より新入生に對して訓辭ありなほ新入生總代及び舊舍生の挨拶あり茲に舍の父たり兄たり弟たる緣は結ばれ候今日正午よりの雨りは何ごとを意味する天籟の響にや雨降つて地固まるとやら此の一堂のちぎりが一層固まる前兆に候はんか各々割り當てられたる新入生を己が室へ連れ返りてはもはや客分たる待遇は解かれて昨日郷家の若樣もこれより舍の弟分として不馴の生活に入るべければ最初は多少の苦勞や不平不滿は免れざるこゝ存じ候、晩夜來の雨に固く結べる蕾も大分膨らみ候へば木曾の山河が紅雲彩霞に閉ざさるゝもこゝ一週間ばかりの事と存じ候（四月十六日岩田記す）

會員異動

○大森悅君　香川縣高松小林區署に轉勤○白井長雄君　朝鮮平安北道林業巡回教師として赴任○攝川金次君　佐久郡畑八村林業技術員として赴任○黑崎洋治君　帝室林野管理局札幌支局上川出張所へ轉勤○赤羽高君　右同斷○柏澤國治君　山形縣西八代郡役所に轉勤○丸山岩吉君　客月奈良弁出張所雇なる辭し勉學の爲上京○千村吉雄君　盛岡高等農林學校林學科に入學○家高甚一君　鹿兒嶋高等農林學校林學科に入學○宮田實君　朝鮮平安北道林業技術員として赴任○伊藤正之勤君　山梨縣恩賜林管理課に赴任○下村博君　木曾支局に轉勤○帝室林野管理局林務講習の爲上京する諸君左の如し都竹武次郎君、田中泰吉君、岡西鎌三君、今井眞二君、

本年度卒業生就職地

（四月十八日マデニ決定ノ分）

朝鮮總督府營林廠千村彌之助君、同上加茂憲太郎君、同上坂本光太郎君、秋田大林區管内能代小林區署川口勇二郎君、同上加藤源一郎君、熊本大林區署百瀨三一君、同上奥利一君、同上樺村計介君、帝室林野管理局古畑秋藏君、同上柘植五郎君、同上竹村節三君、同上長谷部久雄君、同上喜多村弘君、青森大林區署山崎兵平君、同上中畑佐耕君、高知大林區署森次潔君、同上下平佐門君、

大正五年四月廿三日印刷
大正五年四月廿五日發行

編纂兼發行人　長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地　安井正夫
印刷者　長野市西後町丙二十一番地　中澤助
印刷所　長野市西後町乙二十一番地
長野新聞社活版部
印刷所　長野縣西筑摩郡福島町二八九番地
發行所　澤書店